

99年ぶりに3横綱2大関を欠き、一人横綱として土俵を務め、幕内力士の平均体重より20キロも軽いのに、スピードある取り口で秋場所には9度目の優勝を果たした日馬富士関だったが、その口から「横綱として責任を感じ、引退させていただきます」との言葉を聞くことに。九州場所3日目の昨年11月14日、モンゴル人力士らの懇親会で起こった貴ノ岩関への暴行事件が発覚して日本中が驚き、彼はリモコンで殴ったことなどを認め自ら見切りをつけた。

実のところ彼は、将来は親方として部屋を持ち、後進の指導にあたる構想を持っており、そのために日本国籍を取得するため帰化申請の最中だったという。しかし今回の事件により引退時点で日本国籍を取得していない日馬富士関は、親方として相撲協会に残ることができず、今回の引退で角界を去ることとなった。「17年間、一生懸命やってきて、一瞬で全てを失った」。2000年9月に16歳で来日して以来、ここまで積み重ねたものが、自身の間違いでもろくも崩れた無念さを象徴する言葉だった。聖書には

**「だれでも、聞くには早く、語るにはおそく、怒るにはおそいようにしなさい。」**

**ヤコブの手紙1章19節、**

とあるが、これは我々すべてに当てはまることではなからうか。カッとなって人や物を傷つける。或いはいらぬ一言で相手の心を刺す。修復不可能な事態を招くことが。それがもたらすリスクを頭で分かってはいるものの、カッとなった瞬間に自らを律する困難さに年齢や性別、人種や背景の差異は殆どなからう。

しかし我らには朗報がある。どこまでも柔和で穏やかなイエスのイメージに焦点を合わせることだ。彼を救い主キリストと信じ、彼の聖霊に心を満たされつつ歩む。そうすることで平安を保ち、相手のことも思いやり、セルフコントロールも可能になる。

